

札幌を「ふるさと」として

東京札幌会 幹事 道見由貴

道外の人にとって札幌は北海道を象徴する街。札幌で生れ育った札幌っ子はもちろんのこと、学生時代を札幌で過ごした人、札幌で働いたことや暮らしたことがある人はもとより、北海道で生れ育った道産子にとつて、道都、札幌はきつとどこかであつてつながっている街ではないだろうか。

私自身、誕生からの15年を道北の幌延町で過ごし、10代半ばからの13年間を札幌で暮らし、その後、東京に移り住んで20年余りとなつた。

東京での歳月がどれほど増えても、今も母が暮らす実家の幌延は忘れがたき故郷、多くの友人、知人がいる札幌は心に刻まれた出身地、どちらも大切な「ふるさと」であることに変わりはない。もう一度暮らすことは無いかもしれないけれど、そこに戻つた時、「帰つて来たよ」と思える場所。どんなに遠く時間や距離を隔てても、いつも見えない糸でつながっている。

ふるさとを持つていることを嬉しく思う。

東日本大震災は

ふるさと北海道にも

大きな被害

未曾有と言われた東日本大震災、3月11日以降はテレビ、新聞そしてラジオは連日のように太平洋東北4県を中心とした被害状況が報道されていた。

地震被害と津波被害それに加えて原発放射能災害、併せて国難に対する国の指導者達の姿。行方不明者、死傷者、着のみのままの被害者、まだ寒さが残る被災地で食料情報、トイレ、水、灯りの無い生活に追いやられ、安全ですか？と問うと「安全です」と記者会見し、2日後には「避難して下さい」と広報車が巡回、1カ月後には立ち

入り禁止区域が設定、原子力発電所の放射能漏れによる危険地域の指定、農産物、海産物、家畜にいたるまで想像を遙かに超える被害状況に、最も頼りにされる国民が選んだ平均年俸2500万円の700名を超える国会議員の対応は全てが後手後手に回り、恐怖と不安と悲惨と不信の姿は、痛々しい程に写し出されていた。

三陸沖に近く、海で繋がっているふるさと北海道への影響がとて心配された。

渡島、胆振、日高、十勝、根室、釧路の各太平洋沿岸の支庁管内には大きな被害が次々と発生、情報が集積されることになった。

道内の被害状況について北海道庁から4月半ばに次のように発表された。

道内の最大震度	4
最大津波の高さ	3.9メートル
人的被害	死者 1名 負傷者 3名
物的被害	床上、床下浸水、住宅損壊、 732件 施設の損壊 4件 漁港の損壊 141件 漁船の損壊 703隻 自動車・車両損壊 973台

道内における被害総額は、約255億円に達したと言われている。付帯して北海道産業の観光キャンセル、養殖漁業被害等、今後累進的に増加することが充分予測されると発表されていた。

日本における地震の記録は5世紀、奈良地方の地震発生が日本書紀に記録されている。又北海道地方における地震記録は蝦夷地と称されていた時代には存在しないとされている。

1894年6月(明治17年)根室半島沖地震(M7.9)が最初の記録として残されている。参考にはその後北海道におけるマグニチュード6以上の地震記録は、次のとおりである。

大正	4年 3月 (1915)	北海道十勝沖地震 (M7.0)
	7年 9月 (1918)	千島列島、ウルフ島沖地震 (M8.0)
	12年 3月 (1923)	関東大震災 (M7.9)
昭和	8年 9月 (1933)	三陸沖地震 (北海道に被害多し) (M7.8)
	13年 5月 (1938)	屈斜路湖地震 (M6.0)
	15年 8月 (1940)	積丹半島沖地震 (M7.5)
	25年 2月 (1950)	宗谷東方沖地震 (M7.5)
	27年 3月 (1952)	十勝沖地震 (M8.2)
	29年 9月 (1954)	洞爺丸台風
	33年 11月 (1958)	択捉島沖地震 (M8.1)
	36年 8月 (1961)	釧路沖地震 (M7.2)
	38年 10月 (1963)	択捉島沖地震 (M8.1)
	43年 5月 (1968)	十勝沖地震 (M7.9)
	44年 8月 (1969)	北海道東方沖地震 (M7.8)
	48年 6月 (1973)	根室沖地震 (M7.4)
	52年 8月 (1977)	有珠岳、噴火
	57年 3月 (1982)	浦河沖地震 (M7.1)
平成	5年 1月 (1993)	釧路沖地震 (M7.8)
	5年 7月 (1993)	北海道南西沖地震 (M7.8)
	6年 10月 (1994)	北海道東方沖地震 (M8.2)
	7年 1月 (1995)	阪神・淡路大震災 (M7.8)
	7年 12月 (1995)	択捉島沖地震 (M7.7)
	15年 9月 (2003)	十勝沖地震 (M8.0)
	16年 11月 (2004)	釧路沖地震 (M7.1)
	16年 12月 (2004)	留萌支庁南部地震 (M6.1)
	19年 7月 (2007)	新潟・中越地震 (M6.8)
	20年 9月 (2008)	十勝沖地震 (M7.1)
	23年 3月 (2011)	東日本大震災 (M9.0)

自然災害地震、津波、噴火、台風、洪水)併せて現代は、人的災害(都市公害、工場公害、交通災害)との共存を余儀なくされる日本の国土、特に災害には国の指導者たる700名を超える国会議員と取り巻く霞が関の多くの役所は、災害時に後手後手にまわり、国難災害は国際社会からは、「国民より、派閥と仲間を大事にする権力者たちの特権集団」と外国人記者に表現されている姿がとて印象的であつた。自然災害には、人間の感情を所有せず、基準と限度は存在しない。存在するのは過去のデータのみにある。

過去の歴史に学べ、そして工夫せよと先人達は告げていった。今も、被災者は失望の中で、どん底からの頑張り「復興・復旧」に向けて自助努力されている姿に胸を打たれる。東北と併せて、ふるさと北海道の災害復興・復旧には早期に実現されることを願っている。

東京室蘭会顧問

小暮 安彦